暁の空の下には、陽炎が揺蕩う、遠く長いトンネルが伸びていた。ゆっくりと潜り抜けたその先には、森と海が複雑に入り組んだ城下街があった。少年は心踊らせ、笑ってその光景を見つめながら、一つ一つ、心にある星を数えていた。

もう少しなんだな。

心に残っている少女の面影が脳裏に翳って、今までの思い残しとこれからのこれからのことを話そうと思っていた。

少女が城下街で待っている、と頼りになる男性から両手剣を持たされて、少年の旅の終わりを一人で感じていた。ゆっくりと光景から目を外し、夜の帳が降りてくる。近くの森の中に入って、背負っていた鞄から寝泊まり出来るセットを取り出し、夜が終わるのを待つために、準備する。その間に心は薔薇色に染まっていく。

逢えたら、まずは何をしようかな？

大切で大好きな少女のことを想い、その仲を引き裂かれてしまった運命に抗った。それにもしかしたら打ち克てたのかかもしれない。

このことも教えてあげたらとても喜ぶだろう。

だから、まずは。

樹とコンクリートの壁にある引っ掛けにハンモックの紐をかけ、荷物を樹の上に置いて陽射

しが何かに遮られた。あれ？　と思い、横になる前に樹々に邪魔されている空への視界を確保して、見上げると、鳥が幾匹も飛んでいた光景が、少年の想いを昂らせた。
「かなり、祝福してくれているな」
始めて出た言葉がそんな言葉だったとしても。それがたとえ、伝わらなくても。それでも、僕は――。
これ以上考えても仕方ない。だから、もう、一旦横になろう。
そして、これからのことをいっぱい話そう。
そんなことを考えていた。

鳥みたいに自由になりたい。
両親に言葉が器用に使えるようになってから言ったことはそれだった。少年はにこにこしながら、空の上にいるはずの鳥を、指差して言った。両親は言葉が使えることに喜んで、そして「どうして、そんなことを思ったの？」とにこやかに言った。少年はやはりにこにこしながら、「自由になったら色んなことが出来るから！　そして、あの娘に逢いに行くんだ！」と言った。両親はそんな娘がいたのかは知らなかったが、幼い我が子がこんなにも笑っていられるのなら、それを援助してあげようと思った。だから、言った。「なら、まずは勉強して、身体を鍛えて、旅が出来ないといけないね。だから、まずはそれらをしよっか！　私達も応援するから、帰っ

て来たら、その娘と一緒になってね」と言った。多分わかっていないだろうけど、両親は笑顔で「うん！」とにこやかな少年の頭を撫でた。

それが、最期の言葉になったとも少年は思ってもいなかったが、それでも、旅に出た頃はもう、両親は、異世界へと行ってしまった。まずはそのことを伝えないといけない、両親の祖父母はそうすぐに思ったが、時既に遅しとはまさにこのことで、少年も旅に出ていたのだ。祖父母の残念そうな顔はもう、思い出すこともできなくなっていた――。

「あれ？」

久し振りに見た思い出が過って、気付けば頬から涙が伝っていた。笑っていたはずなのに、と少女は何かを思い出そうと、机に置いていたペンと紙を見つめながら頭を掻いた。

「はぁ、今更、僕に何ができるんだろう」

一人で暮らすことになってもう、どれくらいの日々が経ったのか、背後にあるカレンダーに書かれていた丸印がそれを証明していた。塔の最上部にある、高い部屋は誰にも見つかっていない感じで、家具もベッドも全てある。塔の下には綺麗で紅い絨毯が敷かれている。

「思い出すためとはいえ、僕って言うの止めよっかなぁ……。もっとあの人に聞いてみたいけど……」

黄昏てしまう表情にアンニュイが漂い、塔から見える景色はただただ雲と陽射しが広大に広

がっていた。空は相も変わらず綺麗な景色を作ることに急がしそうだった。
　少女は空から視線を外し、机の蒼に肘をついて、何かを考えようとした。でも、その何かがわからないため、先程思い出した内容をペンで紙に絵と一緒に描こうかと思っていた。何かは「僕だけじゃ、完成しないよ」と仕方なさを感じる声音で呟き、やはりペンと紙を見つめてしまって描けなかった。髪の毛がふわりと浮かんでいき、サッシのない外から鳥が投げた、その物が少女の机に綺麗に置かれた。
「あら。お久しぶりね。アイル」
「お久しぶりですね。愛佳様」
　今日、初めて笑顔になった愛佳と呼ばれた少女はアイルと呼んだ、青と赤と黄緑で染まっている体毛に触れて何かがわかった。
「そっか、暫く会わなかったから、寂しさだったのね」
「どうしましたか？　突然ですけど」
「いやね、さっきから考えることがあってね。その答えが寂しさかなぁ？　って思ったのよ」
「そうなんですね。とりあえず、その中身を確認していただけると」
「ん？　あぁ、小包み？　何かしら」
　愛佳は何かを期待しながら小包みをゆっくりと破らない程度の手捌きで開いた。無駄に手捌きが良いと今はいない、お母さんからはよく言われていたけど、そんなことは思い出の中だけ

でいい。
　開いてみると、驚いた。
「これって……アイル、どこで貰って来たの？」
「城下街で拾ったものものあるけど、愛佳様が愛好為されている、お店にあったので、記念に」
「……ありがとう。これであの少年に逢いに行ける」
「わたくしめもついていきましょうか？」
「そうしてくれると助かるわ。でも、ホントに驚いたわ」
　手元に置いて、それを観察すると、星屑の欠片を中に包んだ綺麗な宝石であり、尚且つ、指輪にもなっていた。名前はわからないが、綺麗な指輪が他にもいくらかあり、どれも陽射しで塔の内部を照らすほど煌めいた。
　ボクは一つだけ取って、指にゆっくりとそれを光と一緒に嵌めた。そして、アイルにも、指を出させて、そこに他の指輪を嵌めた。
「じゃあ、行こうか」
「でも、どうやって塔の下に降りるのですか？」
「こうするのよ」
　アイルの指を取って元々用意していた旅行鞄の紐をくぐり付け、それに手を結びつけ、アイルを外に出した。力があるはずだから、一人ぐらい行けるだろう。

「ちょ！　重いって！　止めてくれ！」

そんなことが黄昏時がゆっくりと帳を降ろそうとした頃、一匹の声がとにかくいたるところに響き、陽射しは止んでいった。